

「使徒言行録」

2016年02月03日

使徒言行録1章1節～2節。テオフィロさま、わたしは先に第一巻を著して、イエスが行い、また教え始めてから、お選びになった使徒たちに聖霊を通して指図を与え、天に上げられた日までのすべてのことについて書き記しました。

『使徒言行録』は主イエスの福音宣教のために使徒とされた人々の言葉と行いを記した書物である。使徒とは「遣わされた者」という意味である。使徒言行録は使徒たちの宣教活動をダイナミックに描いている。ルカ福音書と使徒言行録は「ルカ文書」と言われ、著者はルカとされてきた。ルカは、コロサイ書4章14節に「愛する医者ルカ」と書かれている。パウロが書いたフィレモン書の24節に「ルカからもよろしくとのことです」とあるように、パウロとルカは親しい関係があった。ルカは医者で、パウロの宣教の同労者であったことは確かであろうが、詳しいことは分かっていない。パウロの福音の核心は「信仰義認」であるが、ルカ文書は信仰義認論が希薄である。著者はパウロの手紙を読んでいないようである。年代的にも、時代が下がって90年代に書かれたものと思われる。ルカが著者であるとは考えられない。誰であるかは分かっていない。

ルカ福音書は「わたしたちの間で実現した事柄について、最初から目撃して御言葉のために働いた人々がわたしたちに伝えたとおりに、物語を書き連ねようと、多くの人々が既に手を着けています。そこで、敬愛するテオフィロさま、わたしもすべての事を初めから詳しく調べていますので、順序正しく書いてあなたに献呈するのがよいと思いました。お受けになった教えが確実なものであることを、よく分かっていたいただきたいのであります」と書き出している。主イエスが現された福音を目撃した人々は物語を書こうと手をつけている。そこで、私も初めから調べているので、順序正しく書いて献呈したい。主イエスの教えが確かなものであることを知っていたきたいと、ルカ福音書を書く目的を述べている。使徒言行録の初めに、第一巻で主イエスの行いと教え、選ばれた使徒たちに聖霊を通して教育し、主イエスの昇天までの出来事を書き記し、第二巻において、使徒とされた人々が聖霊に導かれて宣教した言葉と行いについて書き、全体をつなげようとしている。ルカ福音書と使徒言行録は同一著者の記録と考えてよい。

二冊の書物を献呈する相手は「テオフィロさま」となっている。テオフィロは歴史的に実在した人か、架空の人かは分からない。おそらく、架空の人物であろう。言えることは、テオフィロは身分の高いローマ人であることである。ルカ文書は、ローマ人が福音を受け入れ、ローマ人に使徒たちの命を賭した宣教活動を知ってもらう目的で書いている。主イエスの福音はユダヤ人には排撃されたが、ローマ人には好意的に受け入れられたと一貫した書き方をしている。著者はユダヤ教に通じた異邦人キリスト者であろう。

使徒言行録は、その内容から「聖霊行伝」とも言われている。使徒たちは人の思いを超えた聖霊に押し出されて宣教しているからである。そこには「神の救済史」という視点が貫かれている。預言、成就、完成という神による救済史の中で、主イエスは救済の器として用いられている。使徒たちの宣教も神の救済史に組み込まれた働きとして位置づけられている。主イエスの福音は全世界に宣教され、世界は神の救済の歴史である。使徒言行録を読むと、使徒たちを支え、導いた同じ聖霊によって、今日の私たちの教会があることを知らされ、励まされ嬉しくなる。